

意識過剰のハイエナ・コンプレックスと無意識過剰の「上から目線」

——調査現場における関係性と倫理審査——

同志社大学 佐藤郁哉

かつて開高健による造語として広く知られていた言葉に「ハイエナ・コンプレックス」というものがある。文学者でありながら、戦時下のベトナムやアフリカあるいは中近東で現地取材をおこない数々のレポートやエッセイを発表した開高が、戦地での体験を振り返り苦い悔恨を込めて言い表したのが、このハイエナ・コンプレックスという言葉である。

少し長くなってしまいが、開高自身による言及の一つを以下に引用してみたい——「異国の血みどろの惨禍を目撃してレポートを書く仕事をきれぎれながらも、もう十年間、私はやってきたが、いつもその場にあって地べたによこたわって呻吟する人を、助けもせず、祈りもせず、ただ手をぶらさげたままでまじまじと上から見おろしているだけの姿勢、そして大後方の空調のきいたホテルの部屋でうつろで激しい文章を書くだけのこと、それでいくらかの稿料をポケットにすることに、そこはかとなく、いいようのない [ハイエナ・]コンプレックスを感じている。やましさを感ずる」（開高健「戦場の博物誌」講談社文芸文庫）。

この開高健の文章は、フィールドワークに限らず、どのような種類のものであれ社会調査をおこなう者に対して根源的な問いを突きつける。また、今回のテーマセッションの課題である倫理審査に含まれる幾つかの問題点について考えていく上での起点になるとも思われる。

開高の壮絶な体験とは比ぶべくもないが、私自身も、少年院や刑務所あるいは暴走族集団を対象にした取材の最中、あるいはそれらの体験を元にした著書や論文を執筆している最中に、開高が「ハイエナ・コンプレックス」と呼んだものと恐らくは似通った感覚を持つことになる場合が少なくなかった。その感覚は、その後、ジャズバンドや劇団あるいは出版社を対象にした取材をおこなっていく中で徐々に薄れていったが、完全に解消されていたわけではない。（一方で、この6年あまりのあいだにおこなってきた、大学と学術研究の世界を対象にした現場調査では、同じような感覚を持つことはほとんど無かった。）

その種のコンプレックスを持つというのは、ある場合には意識過剰だとも言える。実際、「調査地被害」（宮本常一）や「調査されるという迷惑」（安溪遊地）について認識しておくことは非常に大切だが、それがあまりにも度を越すと一種の金縛り状態に陥ってしまいかねない。場合によっては、「調査されないという迷惑」を招くことにもなる。

もともと、それとは逆に調査する側と調査される側に存在し得るさまざまな関係性（支配-被支配、友好-敵対、協力-非協力、関心-無関心等）に思いをいたすことができないという、「無意識過剰」にもまた非常に多くの深刻な問題が含まれている。実際、どのような種類のものであれ——質的調査であろうが量的調査であろうが——社会調査が「調査」である限りは、そこに何らかの形で開高のいう「まじまじと上から見おろしているだけの姿勢」が含まれている場合が少なくないだろう。

この点に関しては、英国の社会学者スタンリー・コーエンが *Folk Devils and Moral Panics*(1972)で指摘した、若者文化に対する「商業的搾取」と「イデオロギー的搾取」という概念が参考になる。社会調査の研究倫理について考えていく際には、これら2種の搾取に加えて「学術的搾取」というものを念頭におく必要があると思われる。

本テーマセッションのポイントの一つである倫理審査の普遍性と特殊性について考えていく際にも、調査者が様々な社会関係（現地社会、学術界、公衆等）の中で占めることになる相対的な位置づけについて把握した上で、「いったい誰を守るための倫理審査なのか」という問題について掘り下げて検討していかなければならないだろう。